

秀賞

信じる

宮城教育大学附属中学校

3年 忌部 夏野

お互いを理解し信じ合うこと。それは、私の心の原動力である。簡単そうでとても難しい、そしてとても尊いことだ。中学生になってから、人間関係に何度も悩んできた私。楽しくて最高の時間もたくさん過ごしてきたけれど、その分、苦しくて悩む時間も多く味わってきた。仲が良くても、何かをきっかけに突然関係が変わってしまうのではないか。友達と一緒に、さまざまな活動や思い出づくりをしていく中で、すごく仲良くなったり、逆にすれ違ってしまったりする経験を重ねた私は、いつしかそんな不安ばかり抱くようになった。

本当の友達って何だろう。そもそも、私に友達と呼べる存在はいるのだろうか。私のことを気にかけてくれる人なんていないのではないか。ひとりぼっちになることが怖くて、私は「友達」という関係が分からなくなってしまった。

それでも私は、悩んでいることを誰にも話さなかった。悩んでいる自分を周りに見せたくなくて、一人で抱え込んだ。心を閉じて自分からひとりぼっちになった私は、どうして良いのかがずっと分からず、次第に自分自身にも自信が持てなくなっていた。そんな時だった。

「悩みでも何でも、話聞くよ。」

友達からの何気ない一言だった。私の表情が暗いことに気付いてくれたのかもしれないし、雰囲気がいつもと違ったのかもしれない。それに気が付き、私のことを心配してくれた友達のその一言は、一人で全てを抱えていた私にとって、心が軽くなった瞬間だった。そして私は、抱えていた悩みをとうとう打ち明けた。「友達」という関係が分からなくなってしまったこと。「友達」という関係に自信が持てなくなってしまうこと。話しながらさらに不安は膨らんでいった。せっかく心配してくれたのにこんな話をして、困らせてしまわないだろうか。こんな不安を抱えていることを知ったら、この人も私から離れていってしまうのではないだろうか。やっぱり話さない方が良かったのかなという後悔が一気に押し寄せてきた。その時、こう言われたのだ。

「大丈夫だよ。」

にっこりと微笑みながら、私の心に届いたこの言葉。暗かった私の世界に、一筋の光が差した。私の話を全て聞いて、私の不安を理解してくれて、それでも大丈夫と言ってくれた。私はそれが嬉しかった。周りの人たちや環境に左右されない信頼関係が、これほどすてきで心強いのかと思い知った。私を信頼し、

支えてくれる友達がこんなにも身近にいることを実感した私は、胸がじんわりと熱くなったのだった。

それからの私は、少し変わった。過去のことにとらわれたり、未来のことを不安に考えたりするのではなく、私たちが生きている「今」を大切に、日々を楽しむようになった。一人で抱えていた悩みや不安は、そばにいてくれる友達のおかげで、少しずつ安心や笑顔へ変わっていった。友達という存在が私の心のエネルギーとなって、暗く狭まっていた私の世界を明るく鮮やかな世界へ変えてくれた。

もしかしたらこれまでの私は、目の前の世界だけを考えていたのかもしれない。見方を変えれば、私にはいろいろな友達や仲間がいる。クラスも、学校も、性別も関係ない。私を信じてくれる友達がいて、一緒に過ごしてくれる友達がいる。それは、私が今までさまざまな人と出会って、たくさんの時間を過ごしてきた証拠だ。そして、その時間は長さではなく、内容にこそ価値がある。そこで築かれた信頼や絆は、変化していく人間関係の中でも、決して変わることはないものなのだ。

「本当の友達って何だろう。」

今なら、自信を持って答えられる。本当の友達とは、お互いを理解し、どんな時も信じ合うことができる存在のことだと思う。人はおのおの違うから、仲が良くても価値観や性格が合わなくなることもあるだろう。生活する中で、お互いに理解し信頼し合うことはとても難しい。だからこそ、相手を表面的に捉えたり、他人からの話だけを鵜呑みにしたりするのではなく、すぐに理解できなくても、相手に歩み寄ることや意図をくみ取ろうとすることが大事なのではないかと私は思う。きっとその先には、新しい絆や厚い信頼関係が待っているはずだ。

今、私が前を向いて笑顔で過ごせているのは、温かい心のエネルギーをくれた友達のおかげだ。自信を失っていた私だったが、友達が信じてくれる自分を信じようと思えるようになった。だから今度は私が、友達のエネルギーになり、背中を押せるようになりたい。友達を理解し、信じて応援したい。そして、最後の中学校生活を最高なものにしていきたい。大切な友達と共に。